琉球大学学術リポジトリ

介護等体験の実践に関する研究(第2報)－体験学生に対する質問紙調査から－

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2007-07-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田中, 敦士, 片岡, 淳, Tanaka, Atsushi, Kataoka, Jun メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/870

介護等体験の実践に関する研究（第２報）
—体験学生に対する質問紙調査から—

田　中　敦　士*　　片　岡　　淳**

Practice of the Experience of Care for Elderly and/or Person with Disability (the 2nd report)

— Conclusion from a survey for students —

Atsushi Tanaka*　　Jun Kataoka**

Ⅰ　はじめに

介護等体験特例法の制定により、本大学では、1998年度に入学した学生が2年次になる1999年度から介護等体験が実施された。これまでにいくつかの大学等において、各大学の介護等体験の取り組みの実態について調査や報告が行われている。それらについては、第１報において文献から研究動向の報告も行ったところである。しかし、学生の介護等体験そのものに対する意識や事前指導について、大規模かつ詳細な調査研究は見当たらなかった。

また、介護等体験後、一部の学生による無断欠勤や無断外出、遅刻、障害者への人権侵害など、本学学生の基本的マナーの欠如、介護等体験に対する目的意識の不足等の苦情が、受け入れ学校及び施設側から毎年指摘がありながらも、現在まで具体的な実態把握のための調査は本学において行われてこなかった。

そこで、本研究では、体験学生自身が介護等体験に対してどのような意識を持っているのか、介護等体験の事前指導として行われたオリエンテーションについてどのように感じたのか等について明らかにするため、介護等体験の参加学生に対し、質問紙調査を実施したので本稿で報告する。

なお、受け入れ学校及び施設側が本大学体験学生の態度及び知識についてどのような印象を持っているのか、また、介護等体験に対してどのような考え方をしているのか等を明らかにするため、受け入れ学校・施設に対し意識調査も実施した。その内容については第３報で報告する予定である。

Ⅱ　調査方法

１　調査対象

平成16年度に介護等体験に参加した教育学部生157名、法文学部生３名及び理学部生５名、計165名を対象とした。学部・専修・コース別の対象者数及び回収数・回収率は表Ⅱ－１の通りである。

表Ⅱ－１　学部・専修・コース別の対象者数及び回収数・回収率

所属学部	専修・コース	対象者数	回収者数	回収率
教育学部	国語教育	9	0	0.0%
	社会科教育	7	4	57.1%
	数学教育	8	4	50.0%
	理科教育	9	7	77.8%
	音楽教育	5	1	20.0%
	美術教育	4	1	25.0%
	保健体育	5	5	100.0%
	技術教育	5	3	60.0%
	家政教育	6	5	83.3%
	英語教育	5	5	100.0%
	教育学	7	6	85.7%
	学校心理学	7	6	85.7%
	児童教育	8	7	85.7%
	日本語教育	13	12	92.3%
	情報教育	13	12	92.3%
	生涯健康教育	10	9	90.0%
	島嶼文化教育	14	8	57.1%
	教育カウンセリング	14	0	0.0%
	自然環境教育	8	7	87.5%
法文学部		3	3	100.0%
理学部		5	5	100.0%
	計	165	110	66.7%

*琉球大学教育学部障害児教育教室
**琉球大学教育学部島嶼文化教室

2　調査期間

2005年1月20日に調査票を配布し、2月28日を回答期限とした。

3　調査内容

質問紙調査票の主な質問項目は以下の通りである。

(1) フェイスシート

回答者の属性

・所属学部及び所属専修・コース

・性別

・年齢

介護等体験においての体験学校及び施設の種類

介護等体験においての体験活動

障害児・者との接触経験及び接触機会内容

将来の教師希望度

取得希望の教員免許の種類

フェイスシートでは、回答者の属性のほか、介護等体験の体験学校及び施設の種類や体験活動の内容、障害児との接触経験、将来の教師希望度を設けて、介護等体験の意義やその実施についてどのように捉えているのかを明らかにすることとした。また、所属学部及び所属専修・コースを設けることで、事前指導にどのような違いがみられるのかを明らかにすることとした。

(2) 介護等体験前について

学生が介護等体験に参加する前に介護等体験についてどのような考えを持っていたのかを知るために、三輪（2001）の「介護等体験に関するアンケート調査」を参考にして、以下の質問項目を作成した（表Ⅱ－2）。

回答者の介護等体験についての意識に関する14項目に対して、「5－とても思う　4－やや思う　3－どちらでもない　2－あまり思わない　1－全く思わない」の5段階評定にて明らかにした。

(3) 介護等体験中について

介護等体験中の学生の意識や態度及び知識について知るために、以下の質問項目を作成した（表Ⅱ－3）。

回答者の介護等体験中の学生自身の自分自身の意識に関する9項目に対して、「5－とても思う　4－やや思う　3－どちらでもない　2－あまり思わない　1－全く思わない」の5段階評定にて明らかにした。

表Ⅱ－2　介護等体験についての意識

介護等体験に参加する前、介護等体験についてどのような考えを持っていましたか。次の①～⑭の質問に対してあなたの考えに近い番号にひとつだけ○をつけてください。

①介護等体験は、高齢者や障害児・者に対する理解を深めるきっかけとなる。
②介護等体験は、高齢者や障害児・者に対する誤解や偏見をなくすことができる。
③介護等体験は、相手をあるがままに受け入れ、理解する態度を身につけることができる。
④介護等体験は、児童・生徒理解、人間理解、コミュニケーション能力を身につけることができる。
⑤介護等体験は、高齢者や障害児・者に対する介助・支援の仕方を知ることができる。
⑥介護等体験は、相手を思いやる気持ちを学ぶことができる。
⑦介護等体験は、社会福祉施設や特殊教育諸学校の様子を知ることができる。
⑧介護等体験は、社会福祉施設や特殊教育諸学校の仕事内容がどのようなものであるかを知ることができる。
⑨社会福祉施設での介護等体験の期間（5日間）は短すぎると思う。
⑩特殊教育諸学校での介護等体験の期間（2日間）は短すぎると思う。
⑪介護等体験は、教員免許状を取得する上で小学校・中学校に限らず、高等学校教員免許状についても義務化するべきである。
⑫介護等体験は、教職の単位のためにやらされているという感じで、その意義がよく分からない。
⑬介護等体験は義務化でなくても、このような体験を自主的に参加しようと思う。
⑭介護等体験は、小学校・中学校の教員になろうとする人にとって必要なものである。

表Ⅱ－3　介護等体験中の自分自身の意識

1　介護等体験中のあなたの様子についてお尋ねします。次の①～⑨の質問に対してあなたの様子及び考えに近い番号にひとつだけ○をつをつけてください。
①わたしは、介護等体験の意義や目的を持って積極的・意欲的に活動に取り組んだ。
②わたしは、積極的に高齢者や障害児・者とコミュニケーションを取るように努めた。
③わたしは、楽しんで介護等体験に参加した。
④わからないことがあれば、積極的に職員・教師に質問したいりした。
⑤社会福祉施設において、利用者との接する機会は十分であった。
⑥特殊教育諸学校において、児童と接する機会は十分であった。
⑦介護等体験にあたっての自分自身の知識は十分であった。
⑧介護等体験中、高齢者や障害児・者に関する本や資料を読むなどして勉強した。
⑨介護等体験にあたっての自分自身の態度は十分であった。

また、介護等体験期間中におけるトラブルについて把握するため、「介護等体験期間において施設・学校職員から何か注意を受けたことがありますか」という質問項目を加え、「施設・学校職員からの注意ごと（表Ⅱ－4）」に表記されている16項目の中から、どのような注意があったのかを複数回答でそれぞれ回答してもらうことで、そ

表Ⅱ－4　施設・学校職員からの注意ごと（複数回答可）

1. 無断欠席	2. 無断外出
3. 遅刻	4. 学生同士の私語
5. 服装の乱れ	6. 装飾品の着用
7. 言葉遣い	8. 反抗的な態度・言動
9. やる気のなさ	10. 眠たそうな態度
11. 消極的態度	12. 目的意識の欠如
13. 忘れ物	14. 礼状の送付
15. 高齢者・障害者への人権侵害	16. その他

の実態を明らかにした。

(4) 介護等体験後について

実際に介護等体験を行った後、介護等体験についてどのような考えを持っているのかを知るために、介護等体験前の介護等体験についての意識を知るために使用したものと同様の質問項目を設け(「介護等体験についての意識（表Ⅱ－２)」と同じ)、介護等体験前後の意識の変化について明らかにした。

さらに14項目に加え、介護等体験の満足度とこれからら高齢者や障害児・者との関わりについて知るために、以下の２つの質問項目を加えた(表Ⅱ－５)。

表Ⅱ－５　介護等体験後の介護等体験についての意識追加項目

⑮今回の介護等体験はとても意義深く、満足のいくものであった。
⑯これからも高齢者や障害児・者と関るような機会を持とうと思う。

(5) 事前指導について

本大学教育学部の事前指導は2部構成となっているため、まず、学部のオリエンテーション受講について尋ねた（表Ⅱ－６)。

表Ⅱ－６　学部オリエンテーション受講

1　介護等体験のための事前指導（オリエンテーション）をうけましたか。
　1．受けた　　2．受けていない

また、専修別オリエンテーションが行われたかについて知るため、以下の質問項目（表Ⅱ－７）を設けて、専修・コース別においての事前指導の実態を明らかにした。

表Ⅱ－７　専修別オリエンテーション

2　教育学部に所属する学生は専修別オリエンテーションを設けていますが、専修別に事前指導は行われましたか。
　1．行われた　　2．行われていない

前出の質問に対して「1．行われた」と回答した者を対象に、「専修別オリエンテーションの内容（表Ⅱ－８)」に表記されている14項目の中から、どのような事前指導が行われたのかを複数回答でそれぞれ回答してもらうことで、その実態を明らかにした。

表Ⅱ－８　専修別オリエンテーションの内容（複数回答可）

1. 介護等体験の概要	2. 介護等体験の意義・目的
3. 基本的マナー	4. 服装・勤務態度
5. 参加者の最終確認	6. 学生の連絡先の確認
7. 提出書類の確認	8. 健康診断書の説明
9. 保健の説明と確認	10. 受け入れ先の連絡方法
11. お礼状の書き方	12. 日程の説明
13. 介護等体験証明書の保管注意	14. その他

事前指導の必要性や学部オリエンテーションでの事前指導内容の適正度を知るために、以下の質問項目を作成した（表Ⅱ－９)。

回答者の介護等体験における事前指導についての意識に関する５項目に対して、「５－とても思う　４－やや思う　３－どちらでもない　２－あまり思わない　１－全く思わない」の５段階評定にて明らかにした。

表Ⅱ－９　事前指導についての意識

3　あなたは事前指導についてどのような考えをもっていますか。次の①～⑤の質問に対してあなたの考えに近い番号にひとつだけ○をつけてください。
①介護等体験にあたっての事前指導は必要なものだと思う。
②介護等体験にあたって、大学で行われた事前指導の講義内容はわかりやすく十分なものであった。
③事前指導の講義において学んだ内容は、実際の体験の場においてとても役立つ内容であった。
④わたしは、事前指導のための講義を積極的・意欲的に受けた。
⑤わたしの介護等体験の事前準備は十分だった。

今後よりよい介護等体験が行われるためにも、学生の意識向上を図るような事前指導をすることが必要である。そのため、学生自身が、事前指導においてどのような内容を必要としているのかを知るために、「事前指導において必要だと思う内容（表Ⅱ－10)」に表記されている16項目の中から、必要だと思われる内容を複数回答でそれぞれ回答してもらうことで明らかにした。

表Ⅱ－10　事前指導において必要だと思う内容（複数回答可）

1. 介護等体験の概要	2. 介護等体験の意義・目的
3. 施設および特殊教育諸学校の概要	4. 車椅子の介助の仕方
5. 食事の介助の仕方	6. 排泄介助
7. 関り方について	8. 介護・支援者としての心構え
9. 老いや障害についての基礎的知識	10. 障害の類似体験
11. 実際の体験内容の説明	12. 服装・勤務態度について
13. トラブルの対処法	14. 施設の事前観察
15. 関連するテーマのビデオ・映画鑑賞	
16. その他	

Ⅲ　結果

1　フェイスシート

(1)　回収率

本研究における調査のアンケート回収率は、165名中の110名で、回収率は66.7%であった。

(2)　回答者の所属学部・専修・コース及び性別

回答者の所属学部・専修・コース及び性別を表Ⅲ－1に示した。今回のオリエンテーションは教育学部が教育学部生を対象に実施したものであるが、他学部の教員免許希望者も一部希望制で参加したため、分析に加えることとした。なお、障害児教育専修については養護学校教育実習で代替となるため、調査対象には含めていない。

表Ⅲ－1　回答者の所属学部・専修・コース及び性別

所属学部・専修・コース		男	女	n
教育学部	社会科教育	2(50.0%)	2(50.0%)	4
	数学科教育	2(50.0%)	2(50.0%)	4
	理科教育	6(85.7%)	1(14.3%)	7
	音楽教育	0(0.0%)	1(100.0%)	1
	美術教育	0(0.0%)	1(100.0%)	1
	保健体育	3(60.0%)	2(40.0%)	5
	技術教育	2(66.7%)	1(33.3%)	3
	家政教育	0(0.0%)	5(100.0%)	5
	英語教育	1(20.0%)	4(80.0%)	5
	教育学	4(66.7%)	2(33.3%)	6
	学校心理学	2(33.3%)	4(77.7%)	6
	児童教育	2(28.6%)	5(71.4%)	7
	日本語教育	1(8.3%)	11(91.7%)	12
	情報教育	5(41.7%)	7(58.3%)	12
	生涯健康教育	3(33.3%)	6(66.7%)	9
	島嶼文化教育	2(25.0%)	6(75.0%)	8
	自然環境教育	3(42.9%)	4(57.1%)	7
法文学部		0(0.0%)	3(100.0%)	3
理学部		2(40.0%)	3(60.0%)	5
	計	40(36.4%)	70(63.6%)	110

(3)　回答者の平均年齢

回答者の年齢に係る基本統計量を表Ⅲ－2に示した。

表Ⅲ－2　回答者の年齢に係る基本統計量

歳

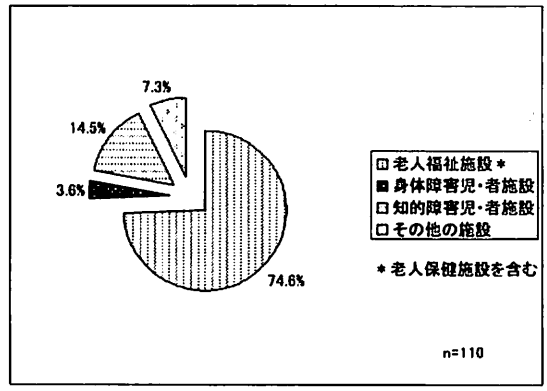
平均値	標準偏差	最小値	最大値	n
20.7	1.0	19	24	110

(4)　回答者の社会福祉施設での体験施設種別

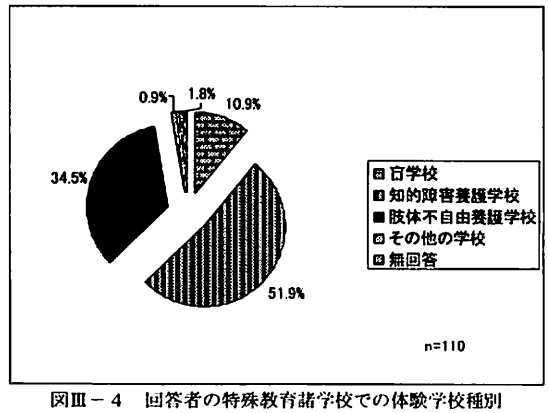
回答者の社会福祉施設での体験施設種別を図Ⅲ－3に示した。回答者の社会福祉施設体験種別について、「老人福祉施設」と回答した者が多く、82名（74.6%）であった。次いで、「知的障害児・者施設」が16名（14.5%）、「その他の施設」が8名（7.3%）であり、最も少なかったのは「身体障害児・者施設」で4名（3.6%）であった。「その他の施設」とは、乳児院や児童養護施設等が含まれている。

(5)　回答者の特殊教育諸学校での体験学校種別

回答者の特殊教育諸学校での体験学校種別を図Ⅲ－4に示した。回答者の特殊教育諸学校体験種別については、「知的障害養護学校」が多く、57名（51.8%）であった。次いで、「肢体不自由養護学校」が38名（34.5%）、「盲学校」が12名（10.9%）であった。「その他」及び「無回答」であった者が3名もみられたが、おそらく自分が体験した特殊教育諸学校がどの障害種別に属するのかという基本的なことを理解しておらず、答えられなかったものと推測される。



図Ⅲ－3　回答者の社会福祉施設での体験施設種別



図Ⅲ－4　回答者の特殊教育諸学校での体験学校種別

(6)　社会福祉施設での体験内容

社会福祉施設での体験内容を表Ⅲ－5に示した。回答者の社会福祉施設での体験内容について、

「話し相手」と回答した者が多く、105名（95.5%）であった。次いで、「食事介助」が91名（82.7%)、「移動介助」と「レクリエーション活動への参加」が84名（76.4%） であった。

社会福祉施設種別で見ると、大半の学生が体験した「老人福祉施設」では、「話し相手」と回答した者が多く、82名（100%）であった。次いで、「食事介助」が80名（97.6%)、「移動介助」が71名（86.6%）であった。

「身体障害児・者施設」では、「作業介助」と回答した者が多かったのに対し、「知的障害児・者施設」では、「話し相手」と回答した者が多かった。

表Ⅲ－５　社会福祉施設での体験活動

	老人福祉施設	身体障害児・者施設	知的障害児・者施設	その他の施設	全体
1. 移動介助	71(86.6%)	3(75.0%)	7(43.8%)	3(37.5%)	84(76.4%)
2. 食事介助	80(97.6%)	3(75.0%)	3(18.8%)	5(62.5%)	91(82.7%)
3. 作業介助	35(42.7%)	4(100.0%)	12(75.0%)	2(25.0%)	53(48.2%)
4. 入浴排泄介助	28(34.1%)	1(25.0%)	2(12.5%)	3(37.5%)	34(30.9%)
5. 排泄介助	21(25.6%)	2(50.0%)	0(0.0%)	4(50.0%)	27(24.5%)
6. 話し相手	82(100.0%)	3(75.0%)	13(81.3%)	7(87.5%)	105(95.5%)
7. 散歩の付き添い	32(39.0%)	1(25.0%)	5(31.3%)	3(37.5%)	41(37.3%)
8. 行事の補佐	23(28.0%)	2(50.0%)	3(18.8%)	1(12.5%)	29(26.4%)
9. 環境などの維持	17(20.7%)	0(0.0%)	5(31.3%)	0(0.0%)	22(20.0%)
10. 事務補助	4(4.9%)	0(0.0%)	0(0.0%)	2(25.0%)	6(5.5%)
11. レクリエーション活動への参加	70(85.4%)	3(75.0%)	8(50.0%)	3(37.5%)	84(76.4%)
12. その他	1(1.2%)	0(0.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)	1(0.9%)
n	82	4	16	8	110

＊各施設で上位3項目を網掛けにした　　(複数回答)

(7) 特殊教育諸学校での体験内容

特殊教育諸学校での体験内容を表Ⅲ－6に示した。回答者の特殊教育諸学校での体験内容について、「話し相手」と回答した者が多く、92名（85.2%）であった。次いで、「移動介助」が76名（70.4%)、「レクリエーション活動への参加」が58名(53.7%）であった。

特殊教育緒学校種別で見ると、「盲学校」では、「移動介助」と回答した者が多く、11名（91.7%）であった。次いで、「話し相手」が9名（75.0%)、「行事の補佐」が8名（66.7%）であった。

「知的障害養護学校」では、「話し相手」と回答した者が多く、51名（89.5%）であった。次いで、「作業介助」が37名（64.9%)、「レクリエーション活動への参加」が29名（50.9%）であった。

「肢体不自由養護学校」では、「「移動介助」と回答した者が多く、37名（97.4%）であった。次いで、「話し相手」が31名（81.6%)、「食事介助」が27名（71.1%）であった。

表Ⅲ－６　特殊教育諸学校での体験活動

	盲	知的障害養護	肢体不自由	その他の学校	全体
1. 移動介助	11(91.7%)	28(49.1%)	37(97.4%)	0(0.0%)	76(70.4%)
2. 食事介助	0(0.0%)	11(19.3%)	27(71.1%)	0(0.0%)	38(35.2%)
3. 作業介助	3(25.0%)	37(64.9%)	15(39.5%)	0(0.0%)	55(50.9%)
4. 入浴排泄介助	0(0.0%)	4(7.0%)	3(7.9%)	0(0.0%)	7(6.5%)
5. 排泄介助	0(0.0%)	7(12.3%)	16(42.1%)	0(0.0%)	23(21.3%)
6. 話し相手	9(75.0%)	51(89.5%)	31(81.6%)	1(100.0%)	92(85.2%)
7. 散歩の付き添い	4(33.3%)	17(29.8%)	16(42.1%)	1(100.0%)	38(35.2%)
8. 行事の補佐	8(66.7%)	25(43.9%)	18(47.4%)	0(0.0%)	51(47.2%)
9. 環境などの維持	1(8.3%)	9(15.8%)	9(23.7%)	0(0.0%)	19(17.6%)
10. 事務補助	1(8.3%)	2(3.5%)	3(7.9%)	0(0.0%)	6(5.6%)
11. レクリエーション活動への参加	4(33.3%)	29(50.9%)	24(63.2%)	1(100.0%)	58(53.7%)
12. その他	0(0.0%)	0(0.0%)	1(2.5%)	0(0.0%)	1(0.9%)
n	12	57	38	1	108

＊各学校で上位3項目を網掛けにした　　(複数回答)

(8) 回答者の障害児・者との接触経験

回答者の障害児・者との接触経験を表Ⅲ－7に示した。回答者の障害児・者との接触経験については、障害児・者と接触経験が「ある」と回答した者が68名で全体の61.8%を占めた。障害児・者との接触経験を所属学部・専修・コース別に見ると、所属学部・専修・コースによって、障害児・者との接触経験に差がみられることが明らかとなった。

表Ⅲ－７　所属学部・専修・コース別の障害児・者との接触経験

所属学部・専修・コース		接触経験有り	n
教育学部	社会科教育	3(75.0%)	4
	数学教育	1(25.0%)	4
	理科教育	4(57.1%)	7
	音楽教育	1(100.0%)	1
	美術教育	1(100.0%)	1
	保健体育	3(60.0%)	5
	技術教育	2(66.7%)	3
	家政教育	2(40.0%)	5
	英語教育	2(40.0%)	5
	教育学	6(100.0%)	6
	学校心理学	4(66.7%)	6
	児童教育	6(85.7%)	7
	日本語教育	6(50.0%)	12
	情報教育	8(66.7%)	12
	生涯健康教育	4(44.4%)	9
	臨嶼文化教育	6(75.0%)	8
	自然環境教育	4(57.1%)	7
法文学部		3(100.0%)	3
理学部		2(40.0%)	5
計		68(61.8%)	110

＊接触経験50%以上を網掛けにした

(9) 障害児・者との接触機会及び活動内容

障害児・者との接触機会及び活動内容を表Ⅲ－8に示した。障害児・者との接触機会及び活動内容については、「身近に障害児・者がいる」と回答した者が多く、26名（38.2%）であった。次い

表Ⅲ－８　障害児・者との接触機会・活動内容

	全体ｎ＝68
交流学習	13(19.1%)
ボランティア活動	25(36.8%)
身近に障害児・者がいる	26(38.2%)
その他	13(19.1%)
	(複数回答)

で、「ボランティア活動」が25名（36.8%）、「交流学習」が13名（19.1%）であった。「その他」項目では、「クラスにいた」、「学校にいた」などが挙げられていた。

⑽ 所属学部・専修・コース別の将来の教師希望度

所属学部・専修・コース別の将来の教師希望度を表Ⅲ－9に示した。回答者の将来の教師希望度について、「なろうと考えている」と回答した者が多く、57名（51.8%）であった。次いで、「どちらともいえない」が38名（34.5%）、「ならないと思う」が10名（9.1%）と続いた。

表Ⅲ－9　所属学部・専修・コース別の将来の教師希望度

所属学部・専修・コース		なろうと考えている	どちらともいえない	ならないと思う	n
教育学部	社会科教育	3(75.0%)	1(25.0%)	0(0.0%)	4
	数学教育	3(75.0%)	1(25.0%)	0(0.0%)	4
	理科教育	2(28.6%)	5(71.4%)	0(0.0%)	7
	音楽教育	1(100.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)	1
	美術教育	0(0.0%)	1(100.0%)	0(0.0%)	1
	保健体育	5(100.0%)	0(100.0%)	0(0.0%)	5
	技術教育	2(66.7%)	1(33.3%)	0(0.0%)	3
	家政教育	1(20.0%)	3(60.0%)	0(0.0%)	5
	英語教育	4(80.0%)	0(0.0%)	1(20.0%)	5
	教育学	4(66.7%)	1(16.7%)	1(16.7%)	6
	学校心理学	2(33.3%)	4(66.7%)	0(0.0%)	6
	児童教育	6(85.7%)	1(14.3%)	0(0.0%)	7
	日本語教育	6(50.0%)	5(41.7%)	0(0.0%)	12
	情報教育	7(58.3%)	3(25.0%)	0(0.0%)	12
	生涯健康教育	1(11.1%)	3(33.3%)	4(44.4%)	9
	島嶼文化教育	1(12.5%)	5(62.5%)	2(25.0%)	8
	自然環境教育	2(28.6%)	3(42.9%)	2(28.6%)	7
法文学部		2(66.7%)	1(33.3%)	0(0.0%)	3
理学部		5(100.0%)	0(0.0%)	0(0.0%)	5
	計	57(51.8%)	38(34.5%)	10(9.1%)	110

＊教師希望度が高い所と低い所をそれぞれ上位３つを網掛けにした

⑾ 取得を希望する教職免許状の種類

取得を希望する教員免許状の種類を表Ⅲ－10に示した。回答者の取得を希望する教員免許状の種類について、「中学校」と回答した者が多く、74名（67.3%）であった。次いで、「高等学校」が68名（61.8%）、「小学校」が38名（34.5%）、「幼稚園」が13名（11.8%）であった。最も少なかったのが、「養護学校」6名（5.5%）であった。

表Ⅲ－10　取得を希望する教員免許状の種類

	全体ｎ＝110
幼稚園	13(11.8%)
小学校	38(34.5%)
中学校	74(67.3%)
高等学校	68(61.8%)
養護学校	6(5.5%)

（複数回答）

⑿ 中学校免許状の科目種別

中学校免許状の科目種別を表Ⅲ－11に示した。中学校免許状の取得を希望する者は74名であった。科目種別で見ると、「数学」と答えた者が一番多く、14名（18.9%）であった。次いで、「国語」と「理科」、「保健体育」が10名（13.5%）であった。

表Ⅲ－11　中学校免許状の科目種別

	全体ｎ＝74
国語	10(13.5%)
社会	8(10.8%)
数学	14(18.9%)
理科	10(13.5%)
音楽	1(1.4%)
美術	3(4.1%)
保健体育	10(13.5%)
技術	2(2.7%)
家庭	3(4.1%)
英語	6(8.1%)
情報	1(1.4%)

＊上位3科目を網掛けにした　（複数回答）

⒀ 高等学校免許状の科目種別

高等学校免許状の科目種別を表Ⅲ－12に示した。高等学校免許状の取得を希望する学生は68名であった。科目種別で見ると、「数学」と答えた者が一番多く、13名（19.1%）であった。次い

表Ⅲ－12　高等学校免許状の科目種別

	全体ｎ＝68
国語	11(16.2%)
社会	3(4.4%)
歴史	1(1.5%)
地理	2(2.9%)
公民	2(2.9%)
倫理	1(1.5%)
数学	13(19.1%)
理科	7(10.3%)
生物	6(8.8%)
音楽	1(1.5%)
美術	3(4.4%)
保健体育	10(14.7%)
家庭	3(4.4%)
英語	4(5.9%)
情報	6(8.8%)

＊上位3科目を網掛けにした　（複数回答）

で、「国語」が11名（16.2%）、「保健体育」が10名（14.7%）であった。

２　介護等体験前について

表Ⅲ－13は、介護等体験に参加する前の介護等体験に対する考え方についての体験学生の意識を示したものである。ほとんどの項目において、回答者は「やや思う」と回答している。特に、「1. 高齢者や障害児・者に対する理解を深めるきっかけとなる」、「6. 相手を思いやる気持ちを学ぶことができる」、「7. 社会福祉施設や特殊教育諸学校の様子を知ることができる」という3つの項目においては、「とても思う」と答えている。これより、学生は介護等体験に参加する前からある程度介護等体験について肯定的な考えを持っていたことが分かる。しかし、特殊教育諸学校での体験期間については、約8割の体験学生が「短すぎる」と考えていることが明らかとなった。

表Ⅲ－13　体験学生の介護等体験前の意識

	とても思う	やや思う	どちらでもない	あまり思わない	全く思わない
1. 高齢者や障害児・者に対する理解を深めるきっかけとなる。	64(58.2%)	39(35.5%)	4(3.6%)	2(1.8%)	0(0.0%)
2. 高齢者や障害児・者に対する誤解や偏見をなくすことができる。	38(34.6%)	52(47.3%)	13(11.8%)	5(4.5%)	1(0.9%)
3. 相手をあるがままに受け入れ、理解する態度を身につける。	29(26.4%)	56(50.9%)	17(15.5%)	6(5.5%)	1(0.9%)
4. 児童生徒理解、人間理解、コミュニケーション能力を身につける。	35(32.7%)	59(53.6%)	8(7.3%)	5(4.5%)	1(0.9%)
5. 高齢者や障害児・者に対する介助・支援の仕方を知ることができる。	36(32.7%)	61(55.5%)	6(5.5%)	5(4.5%)	1(0.9%)
6. 相手を思いやる気持ちを学ぶことができる。	48(43.6%)	47(42.7%)	12(10.9%)	2(1.8%)	0(0.0%)
7. 社会福祉施設や特殊教育諸学校の様子を知ることができる。	65(59.1%)	36(32.7%)	5(4.5%)	3(2.7%)	0(0.0%)
8. 社会福祉施設や特殊教育諸学校の仕事内容を知ることができる。	41(37.3%)	53(48.2%)	13(11.8%)	2(1.8%)	0(0.0%)
* 9. 社会福祉施設での介護等体験期間は短すぎる。	8(7.3%)	17(15.5%)	33(30.0%)	43(39.1%)	12(10.9%)
*10. 特殊教育諸学校での介護等体験期間は短すぎる。	33(34.5%)	45(40.9%)	17(15.5%)	5(4.5%)	5(4.5%)
11. 高等学校教員免許状についても義務化するべきである。	29(26.4%)	40(36.4%)	22(20.0%)	10(9.1%)	9(8.2%)
*12. 教職免許状の単位のためで、その意義がよくわからない。	6(5.5%)	21(19.1%)	21(19.1%)	43(39.1%)	19(17.3%)
13. 義務化でなくても、このような体験に自主的に参加すると思う。	11(10.0%)	38(34.5%)	37(33.6%)	18(16.4%)	6(5.5%)
14. 小・中学校の教員になろうとする人にとって必要なものである。	37(33.6%)	41(37.3%)	17(15.5%)	12(10.9%)	3(2.7%)

＊各質問において上位を網掛けにした　　n＝110
*逆転項目（否定的）

３　介護等体験中の実態について

(1)　介護等体験中の自分自身について

表Ⅲ－14は、介護等体験中の自分自身についての意識を示したものである。おおむね体験学生は、介護等体験に対する目的意識を持って積極的・意欲的に利用者や児童・生徒及び職員・教師と関り、楽しんで参加したということがわかる。

一方、「7. 介護等体験にあたっての自分自身の知識は十分であった」という項目においては、「あまり思わない」と回答している者が40名（36.4%）もいた。「全く思わない」と回答した者とあわせると、約５割の学生が自分自身の知識について「十分でなかった」と考えていることがわかる。しかし、自分自身の知識が十分なものでなかったと考えながらも、「介護等体験中に、高齢者や障害児・者についての勉強をした」という者は、約3割と少なかった。

表Ⅲ－14　介護等体験中の自分自身の意識

	とても思う	やや思う	どちらでもない	あまり思わない	全く思わない
1. 意欲や目的意識をもって積極的・意欲的に活動に取り組んだ。	36(32.7%)	60(65.5%)	20(18.2%)	2(1.8%)	2(1.8%)
2. 積極的に高齢者や障害児・者とコミュニケーションを取るよう努めた。	56(50.9%)	46(41.8%)	6(5.5%)	1(0.9%)	1(0.9%)
3. 楽しんで、介護等体験に参加した。	42(38.2%)	42(38.2%)	17(15.5%)	6(5.5%)	3(2.7%)
4. わからないことがあれば、積極的に職員・教師に質問したりした。	42(38.2%)	53(47.3%)	11(10.0%)	4(3.6%)	0(0.0%)
5. 社会福祉施設おいて、利用者と接する機会は十分であった。	51(46.4%)	42(38.2%)	12(10.9%)	4(3.6%)	1(0.9%)
6. 特殊教育諸学校において、児童と接する機会は十分であった。	42(38.2%)	42(38.2%)	14(12.7%)	9(8.2%)	2(1.8%)
7. 介護等体験にあたっての自分自身の知識は十分であった。	1(0.9%)	14(12.7%)	45(41.8%)	40(36.4%)	9(8.2%)
8. 介護等体験中、高齢者や障害児・者についての勉強をした。	2(1.8%)	26(23.6%)	33(30.0%)	37(33.6%)	12(10.9%)
9. 介護等体験にあたっての自分自身の態度は十分であった。	22(20.0%)	56(50.9%)	23(20.9%)	7(6.4%)	1(0.9%)

＊各質問において上位を網掛けにした　　n＝110

(2)　施設・学校職員からの注意ごと

施設・学校職員から受けた注意ごとを表Ⅲ－15に示した。回答者の施設・学校職員からの注意ごとについて、「遅刻」と答えた者が一番多く、9名（8.2%）であった。次いで、「言葉遣い」、「消極的態度」が7名（6.4%）、「無断欠席」、「学生同士の私語」、「忘れ物」が4名（3.6%）であった。「その他」の項目では、「入所者のご家族へのあいさつ」、「高齢者と話す時の目線」、「早退」な

表Ⅲ－15　施設・学校職員からの注意ごと

	全体ｎ＝110
1. 無断欠席	4(3.6%)
2. 無断外出	3(2.7%)
3. 遅刻	9(8.2%)
4. 学生同士の私語	4(3.6%)
5. 服装の乱れ	3(2.7%)
6. 装飾品の着用	3(2.7%)
7. 言葉遣い	7(6.4%)
8. 反抗的な態度・言動	0(0.0%)
9. やる気のなさ	1(0.9%)
10. 眠たそうな態度	1(0.9%)
11. 消極的態度	7(6.4%)
12. 目的意識の欠如	3(2.7%)
13. 忘れ物	4(3.6%)
14. 礼状の送付	0(0.0%)
15. 高齢者・障害者への人権侵害	3(2.7%)
16. その他	7(6.4%)

＊上位3項目を網掛けにした　　（複数回答）

どが挙げられていた。

4　介護等体験後について

表Ⅲ－16は、介護等体験に参加した後の介護等体験に対する考え方についての体験学生の意識を示したものである。ほとんどの項目において、回答者は「やや思う」と回答している。特に、「1. 高齢者や障害児・者に対する理解を深めるきっかけとなる」、「6. 相手を思いやる気持ちを学ぶことができる」、「14. 小・中学校の教員になろうとする人にとって必要なものである」という3つの項目においては、「とても思う」と答えている。これより、学生は介護等体験後も介護等体験について肯定的な考えを持っていることがわかる。このことは、約8割の学生が、「今回の体験はとても意義深く、満足のいくものであった」と回答していることからもわかる。

表Ⅲ－16　体験学生の介護等体験後の意識

	とても思う	やや思う	どちらでもない	あまり思わない	全く思わない
1. 高齢者や障害児・者に対する理解を深めるきっかけとなる。	69(63.6%)	47(42.7%)	2(1.8%)	2(1.8%)	0(0.0%)
2. 高齢者や障害児・者に対する偏見をなくすことができる。	41(37.3%)	49(44.5%)	11(10.0%)	7(6.4%)	1(0.9%)
3. 相手をあるがままに受け入れ、理解する態度を身につける。	32(29.1%)	57(51.8%)	16(14.5%)	4(3.6%)	0(0.0%)
4. 児童生徒理解、人間理解、コミュニケーション能力を身につける。	38(34.5%)	57(51.8%)	9(8.2%)	5(4.5%)	0(0.0%)
5. 高齢者や障害児・者に対する介助・支援の仕方を知ることができる。	35(31.8%)	58(52.7%)	8(7.3%)	6(5.5%)	1(0.9%)
6. 相手を思いやる気持ちを学ぶことができる。	49(44.5%)	44(40.0%)	10(9.1%)	5(4.5%)	0(0.0%)
7. 社会福祉施設や特殊教育諸学校の様子を知ることができる。	48(39.2%)	51(46.4%)	8(7.3%)	2(1.8%)	0(0.0%)
8. 社会福祉施設や特殊教育諸学校の仕事内容を知ることができる。	42(38.2%)	56(50.9%)	5(4.6%)	6(5.5%)	0(0.0%)
* 9. 社会福祉施設での介護等体験期間は短すぎる。	14(12.7%)	20(18.2%)	31(28.2%)	30(27.3%)	14(12.7%)
*10. 特殊教育諸学校での介護等体験期間は短すぎる。	34(30.9%)	43(39.1%)	19(17.3%)	10(9.1%)	3(2.7%)
11. 高等学校教員免許状についても義務化するべきである。	30(27.3%)	35(31.8%)	27(24.5%)	11(10.0%)	6(5.5%)
*12. 教職免許状の単位のためで、その意義がよくわからない。	4(3.6%)	14(12.7%)	31(28.2%)	35(31.8%)	24(21.8%)
13. 義務化でなくても、このような体験に自主的に参加すると思う。	14(12.7%)	36(32.7%)	39(35.5%)	15(13.6%)	4(3.6%)
14. 小・中学校の教員になろうとする人にとって必要なものである。	39(35.5%)	39(35.5%)	17(15.5%)	8(7.3%)	4(3.6%)
15. 今回の体験はとても意義深く、満足のいくものであった。	43(39.1%)	48(43.6%)	14(12.7%)	3(2.7%)	0(0.0%)
16. これからも高齢者や障害児・者と関わる機会を持とうと思う。	33(30.0%)	53(48.2%)	19(17.3%)	3(2.7%)	0(0.0%)

＊各質問において上位を網掛けにした　　n＝110

*逆転項目（否定的）

5　事前指導について

(1)　学部オリエンテーション

学部オリエンテーションの受講割合については、すべての回答者が「受けた」と回答している。

(2)　専修別オリエンテーション

専修別オリエンテーション開講割合については、「行われた」が98名（89.1%）、「行われていない」が9名（8.2%）、無回答が2.7%であった。しかし、専修別に行われたにもかかわらず、同じ専修内において、「行われた」と回答している者もいれば、「行われなかった」と回答している者もいるケースがあり、専修別オリエンテーション開催の周知が学生に徹底されていない可能性があることも示唆された。

(3)　専修別オリエンテーションの内容

専修別オリエンテーションの内容を表Ⅲ－17に示した。回答者の専修別オリエンテーションが「行われた」と回答した者は98名であった。その内容については、「介護等体験の概要」と答えた者が一番多く、75名（68.2%）であった。次いで、「服装・勤務態度」が65名（59.1%）、「提出書類の確認」が62名（56.4%）であった。一方、「礼状の書き方」は11名（10.0%）と少なかった。

表Ⅲ－17　専修別オリエンテーションの内容

	全体n＝98
1. 介護等体験の概要	75(68.2%)
2. 介護等体験の意義・目的	48(43.6%)
3. 基本的マナー	61(55.5%)
4. 服装・勤務態度	65(59.1%)
5. 参加者の最終確認	51(46.4%)
6. 学生の連絡先の確認	47(42.7%)
7. 提出書類の確認	62(56.4%)
8. 健康診断書の説明	34(30.9%)
9. 保健の説明と確認	45(40.9%)
10. 受け入れ先への連絡方法	45(40.9%)
11. お礼状の書き方	11(10.0%)
12. 日程の説明	46(41.8%)
13. 介護等体験証明書の保管注意	39(35.5%)
14. その他	3(2.7%)
＊上位3項目を網掛けにした	（複数回答）

(4)　事前指導についての意識

表Ⅲ－18は、事前指導についての体験学生の意識を示したものである。回答者は、「介護等体験にあたっての事前指導は必要なものである」という項目に対して、「とても思う」、「やや思う」をあわせると、約9割の学生が必要であると感じ

表Ⅲ－18　体験学生の事前指導についての意識

	とても思う	やや思う	どちらでもない	あまり思わない	全く思わない
1. 介護等体験にあたっての事前指導は必要なものだと思う。	54(49.1%)	47(42.7%)	3(2.7%)	4(3.6%)	0(0.0%)
2. 大学で行われた事前指導の講義内容はわかりやすく十分なものだった。	9(8.2%)	44(40.0%)	20(23.6%)	21(19.1%)	10(9.1%)
3. 事前指導での講義内容は、実際の体験の場で役立つ内容であった。	8(7.3%)	47(42.7%)	30(27.3%)	17(15.5%)	8(7.3%)
4. わたしは、事前指導のための講義を積極的・意欲的に受けた。	17(15.5%)	55(50.0%)	23(20.9%)	11(10.0%)	3(2.7%)
5. わたしの介護等体験の事前準備は十分だった。	4(3.6%)	40(36.4%)	43(39.1%)	18(16.4%)	5(4.5%)

＊各質問において上位を網掛けにした　　n＝110

ている。大学で行われた講義内容においても、体験学生にとって実際の体験の場においても役立つ適切な内容であったことがわかる。

しかし、「大学で行われた事前指導の講義内容はわかりやすく十分なものだった」という項目に対して、約3割の学生は「あまり思わない」、「全く思わない」と否定的な回答をしている。

(5) 体験学生が事前指導において必要だと思う内容

表Ⅲ－19は、体験学生が事前指導において必要だと思う内容である。最も回答が多かった項目は、「車椅子の介助の仕方」で76名（69.1％）であった。次いで、「介護等体験の概要」と「介護等体験の意義・目的」が74名（67.3％）であった。

社会福祉施設種別で見ると、「老人福祉施設」では「車椅子の介助の仕方」と回答した者が多く、59名（72.0％）であった。次いで、「介護等体験の概要」と「介護等体験の意義・目的」が58名（70.7％）であった。

「身体障害児・者施設」では、「施設及び特殊教育諸学校の概要」と「老いや障害についての基礎的知識」と回答した者が多く、4名（100％）であった。次いで、「車椅子の介助の仕方」が3名（75.0％）であった。

「知的障害児・者施設」では、「トラブルの対処法」と回答した者が多く、12名（75.0％）であった。次いで、「関わり方について」が11名（68.8％）であった。

乳児院や児童養護施設を含む「その他の施設」では、「関わり方について」と回答した者が多く、6名（75.0％）であった。次いで、「介護等体験の概要」と「介護等体験の意義・目的」、「介護・支援者としての心構え」、「老いや障害についての基礎的知識」が5名（62.5％）であった。

Ⅳ 考察

1 介護等体験に対する学生の意識

体験学生は、介護等体験への意識についてのほとんどの項目（「表Ⅲ－13 体験学生の介護等体験前の意識」及び「表Ⅲ－16 体験学生の介護等体験後の意識」参照）において、「やや思う」と回答していることから、肯定的な考えを持っていることが明らかとなった。これは、介護等体験前後においてもほぼ同様であった。「３．相手をあるがままに受け入れ、理解する態度を身につける」、「４．児童生徒理解、人間理解、コミュニケー

表Ⅲ－19 体験学生が事前指導において必要だと思う内容

	老人福祉施設	身体障害児・者施設	知的障害児・者施設	その他の施設	全体
1. 介護等体験の概要	58(70.7%)	2(50.0%)	9(56.3%)	5(62.5%)	74(67.3%)
2. 介護等体験の意義・目的	58(70.7%)	2(50.0%)	9(56.3%)	5(62.5%)	74(67.3%)
3. 施設及び特殊教育諸学校の概要	44(53.7%)	4(100.0%)	8(50.0%)	2(25.0%)	58(52.7%)
4. 車椅子の介助の仕方	59(72.0%)	3(75.0%)	10(62.5%)	4(50.0%)	76(69.1%)
5. 食事の介助の仕方	44(53.7%)	2(50.0%)	9(56.3%)	2(25.0%)	57(51.8%)
6. 排泄介助	19(23.2%)	1(25.0%)	3(18.8%)	0(0.0%)	23(20.9%)
7. 関り方について	54(65.9%)	2(50.0%)	11(68.8%)	6(75.0%)	73(66.4%)
8. 介護・支援者としての心構え	50(61.0%)	2(50.0%)	9(56.3%)	5(62.5%)	66(60.0%)
9. 老いや障害についての基礎的知識	49(59.8%)	4(100.0%)	10(62.5%)	5(62.5%)	68(61.8%)
10. 障害の類似体験	24(29.3%)	2(50.0%)	6(37.5%)	4(50.0%)	36(32.7%)
11. 実際の体験内容	38(46.3%)	1(25.0%)	7(43.8%)	4(50.0%)	50(45.5%)
12. 服装・勤務態度について	35(42.7%)	2(50.0%)	10(62.5%)	2(25.0%)	49(44.5%)
13. トラブルの対処法	45(54.9%)	2(50.0%)	12(75.0%)	3(37.5%)	62(56.4%)
14. 施設の事前観察	27(32.9%)	1(25.0%)	6(37.5%)	2(25.0%)	36(32.7%)
15. 関連するテーマのビデオ・映画鑑賞	31(37.8%)	1(25.0%)	5(31.3%)	4(50.0%)	41(37.3%)
16. その他	3(3.7%)	0(0.0%)	1(6.3%)	1(12.5%)	5(4.5%)
n	82	4	16	8	110

＊各施設で上位3項目を網掛けにした　　(複数回答)

ション能力を身につける」という項目においては、体験前に比べ、わずかではあるが、「とても思う」と回答している割合が高くなった。これは、実際に介護等体験に参加することによって、体験学生が身につけられたものだと考えられ、介護等体験の成果であると言える。

また、約８割の体験学生が、「今回の体験はとても意義深く、満足のいくものであった」と回答し、「これからも高齢者や障害児・者と関る機会を持とうと思う」と述べていることから、体験学生にとって意味のある体験であったと言える。

介護等体験期間については、社会福祉施設での体験期間は現状の５日間で「十分である」と考えている。しかし、特殊教育諸学校での体験期間は現状が2日間であるが、介護等体験前後において、約７割の学生が「十分でない」と考えていることが明らかとなった。これは、体験学生の多くが将来教師になることを希望しているために、その対象となる児童・生徒との接触機会をより多く望んでいるためだと考えられる。社会福祉施設での介護等体験も大変意味のあるものだが、やはり、学校という場で働く体験学生にとって、特殊教育諸学校での体験を充実したものにすることは重要なことであり、その期間でどのように充実させるかが今後の課題となるであろう。

２　介護等体験の参加状況に関する学生の自己評価

体験学生は、自分自身の介護等体験の参加状況についてのほとんどの項目（「表Ⅲ－14　介護等体験中の自分自身の意識」参照）において、「とても思う」と回答していることから、「目的意識を持って積極的・意欲的に活動に取り組み、楽しんで介護等体験に参加した」と自己評価している。これは、介護等体験中の態度については、ほとんどの学生が「十分であった」と回答していることからも明らかである。

自分自身の知識については、「十分でなかった」と回答した者が49名（44.6％）で、ほとんどの学生が「十分ではなかった」と考えている。しかし、介護等体験を行うにあたって、自分自身の知識は十分なものではないと感じているにも関わらず、介護等体験中に、高齢者や障害児・者についての勉強を行った者は28名（25.4％）にしかすぎなかった。学生は、自主的に介護や障害についての知識を得たりしようとはせずに、実際に利用者や障害児・者と触れ合う中で何かを学ぼうと考えている傾向が強いことがうかがえる。介護等体験は学生が学ぶ場ではあるが、受け入れ学校及び施設、利用者や児童・生徒と直接関わるものであり、他人の空間を貸してもらい体験しているものなので、しっかりと基礎的な勉強をした上で臨むのが当然である。自主的な学習に慣れていない学生に対して、早急に自主的な事前準備を求めることは難しい。だからこそ、自主的な学習を習慣づけ、十分な基礎知識をつけるための事前指導のあり方を検討していくことが重要となってくるのである。

３　事前指導に対する学生の評価

ほとんどの体験学生が、介護等体験にあたっての事前指導は必要なものだと考えていて、「とても思う」と「やや思う」をあわせると101名（91.8％）にもなる。大学で行われた事前指導についての項目（「表Ⅲ－18　体験学生の事前指導についての意識」参照）において、「やや思う」と回答していることから、ある程度十分な内容であったように考えられる。しかし、その他の自由記述において介護等体験に対する感想を書いてもらったところ、事前指導について否定的な意見を述べている学生が多かった。表Ⅳ－１は、自由記述の中で事前指導について書かれたものの内容を抽出したものである。

表Ⅳ－１　自由記述における事前指導についての評価

	回答数
事前に心構えができた	1
基礎的知識が得られた	4
施設の人の話が聞けた	2
時間・期間に対する不満	8
内容に対する不満	13
講義教官に対する不満	12

n＝76

その他の自由記述欄において記述した学生は72名で、その内、事前指導について記述した学生は40名であった。事前指導について、9名の学生は、基礎的な知識が得られたものであり、心構えができたとプラスに評価している。しかし、残

りの31名はマイナス的な評価をしている。その中でも内容に対する不満が最も多い。具体的には、「事前指導の時間が短く、介護や障害について多くのことを知るには内容が浅く十分ではなかった」、「車椅子だけではなく、食事介助などの実習もするべきだ」、「社会福祉施設についての内容がもっと知りたかった」などである。やはり、７時間の事前指導だけでは十分なものでないことが明確となった。

4　特殊教育基礎科目の学部必修化の必要性

「今後の特別支援教育の在り方について（最終報告)」の提言によって、今後全ての小・中学校に「特別支援教室」が設置され、全ての教員は障害のある児童・生徒の指導にあたることが予測される。当然、将来教師になるであろう学生に対して、特殊教育（特別支援教育）について時間をかけて学ばせることは必要になってくる。「介護等体験」の義務化によって、障害のある児童・生徒と関わる機会が持てたことは大変意義深いことではあるが、時間的にも内容的に十分であるとは言い難い。大学側は、これからの学校現場を見据えた、特殊教育について学ぶためのカリキュラムを検討していく必要がある。すでにいくつかの大学では、学部必修科目として、特殊教育について学ぶ講義を設けている大学もある。

特殊教育基礎科目の学部必修化が実現されれば、養護学校免許を持たない学生も特殊教育についての基礎的な知識をじっくりと学ぶことができる。また、「介護等体験」の事前指導としての大きな役割を果たすことになり、よりよい「介護等体験」の実施につながっていくことになるだろう。本大学においても、特殊教育基礎科目の学部必修化を含めた、今後の学校現場を見据えたカリキュラムを検討する必要があるだろう。

付記

本調査は、平成16年度琉球大学教育研究重点化経費による介護等体験プロジェクトの一環として実施した。本プロジェクトの実施は教育学部の田中敦士と片岡淳が担当した。また、資料整理や分析等には平成18年3月卒業生の比嘉佐和子（現　北谷小学校）に協力頂いた。本プロジェクトにご協力頂いた先生方および調査に回答下さいました皆様方に深く感謝申し上げます。

引用文献

三輪定宣（2001）　教育養成・研修における体験学習の意義を問う－介護等体験に関するアンケート調査を踏まえて－　教育学研究, 68(4), 461-466.